ふたたび出会う世界があるから

本多 昭人

本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』と略記しております。

はじめに

本多昭人師に連載原稿の執筆依頼をするため、島根のご自坊を訪ねたのは本多師のがん再発から一年半が経った二〇一四年九月のことだった。

その年の春、私は本多師から、自らの半生をまとめた『燈炬』という自費出版本をいただいていた。読み始めると間もなく、医師から命のタイムリミットを知らされて、帰途についたときの心境が綴られた一文が目に止まった。「病院から家に帰るまでの通いなれた道路沿いの風景が、今までとは違って見えた」――。

わが身に何が起きているのか、正確に受け止められないもどかしさと、不安に輪をかけるかのように、容赦なく襲ってくる命の終焉への強迫観念。これは、末期がんを告げられた人の誰もが抱く、マイナスの心のありようだった。

しかし文章からは、本多師のもう一つの感慨も伝わってきた。それは、限りある命と知ったからこそ感じることのできる、わが身を取り巻くありとあらゆるものへの愛

おしさ、かけがえのなさという、プラスの心のありようである。

私は、その後の病苦と死苦とに向き合う本多師が気になり、「日々、何を感じ、何を思うのか、そのありのままの気持ちを綴ってもらいたい」との願いを持って訪れたのだった。本多師の苦悩を超えて生きるその姿は、きっと多くの人びとに共感と勇気を与えるに違いないと確信したからでもあった。

こうして二〇一五年四月、大阪の本願寺津村別院の月刊教化誌「御堂さん」に、「癌を生きる」と題して連載が始まった。余命二年と本多師自身が目算されていた年月をはるかに超え、丸四年間、一度も休むことなく、二〇一九年三月号の最終回まで執筆し続け、校了後間もない二月十一日、浄土往生の素懐（そかい）を遂げられたのだ。お見事というほかない。

内容は本文をお読みいただくことに尽きるが、あえて一言申しあげれば、回を重ねるごとに、いのちの深まりを感じずにはおれない。それは、本多師の苦悩のど真ん中に阿弥陀如来がおられたからといえる。如来さまの大悲の本願を心の中心に置いたとき、人は誰でも苦悩を超えて、たくましくいきいきと生きることができる。そのことを、本多師は生涯をかけて私たちに示してくださったのだ。

反響も大きかったことから、このたび本願寺出版社から一冊にまとめて発刊されることになった。本多師ご本人も生前の希望だったし、何より私が出版のお約束をした以上、実現できた喜びと安堵（あんど）の思いが胸に込み上がってくる。

本書が、より多くの人に親しまれ、さらに人生に苦悩を感じたすべての人が、如来のご本願の温もりに出会われて、たくましく生き抜かれるご縁となるならば、これほどうれしいことはない。本多師も同じ思いだろう。

なお、出版にあたって、ご尽力いただいた本願寺出版社の元部長・矢鳴俊哉さん、「御堂さん」編集長の菅純和さん、それに編集の労をいただいた本願寺出版社のスタッフの皆様に、心から御礼申しあげたい。

二〇一九（令和元）年十二月

本多昭人 法弟　末本　弘然

はじめに……末本　弘然……3

第一章　生きるために苦しむ

突きつけられた現実……11
「終活」を全うする中で……14
生きるために苦しむ現実……18
苦の中で味わう喜びと気づき……22
兄の死が伝える人生の終着駅……26
むしばむ病魔しぶといアイツ……29
住職三十年〝最後〟の大事業……32
苦悩の隣り合わせにあるお慈悲……35
一粒の効用と阿弥陀さま……38
苦しみがあったから……42

第二章　絶望を生きる喜びに

支えてくれる仲間がいて……49
苦悩の中に届く希望とよび声……53
再会の笑顔につながる喜び……56
欄間に隠された秘密の心……59
そのまんまでいい安心感……63
いつかは不明な「最後まで」……66
生死の苦海を受け止める涙……69
いのちの真実を見つめて……73
声援に苦を緩和され……77
医療の次に仏教寺院のワケ……81

第三章　揺るがぬ人生

不確実なものより確かな仏地……87
父の背中を心で感じて……91
テーマ通りの父の最期……95
堪え難い愛別離苦の想い……98
副作用の〝強弱〟を決め手に……102
生の行き着く先は〝お浄土〟……105
数珠つなぎ・聴聞の旅……108
希望へ転じるお念仏の一本道……112
突きつけられる老いの象徴……115

たった六字、されど六字……118

第四章　生きるとは出会い続けること

七十年前の婦人会報一号……125
「降誕」その意味に感謝して……128
一冊の本と念仏の力……132
私をむしばむ二つの変化……136
一難去ってまた一難……139
光る青信号と灯った黄信号……142
残された時間を大切に……145
変わらない幸せの総量……149
どこまでも寄り添い救う……152
ふたたび出会う世界があるから……156
追悼文―本多昭人先輩に謹んで申し上げます……末本　弘然……160

挿画・装画／徂徠　匡男

第一章　生きるために苦しむ

突きつけられた現実

2015年4月

私ががんの再発を知ったのは、今から二年前の四月十八日のことでした。

その日、出雲市の島根大学医学部附属病院で、担当の医師が、「両肺など三カ所にがんが転移しています。手術はできないので抗がん剤で治療しましょう」と告げたのです。この言葉に、私はただ呆然とするばかりでした。

入院手続きをした後、看護師さんのカウンセリングを受けましたが、私は彼女のひと言ひと言に全神経を集中しました。それは、〝この先、何年、生きられるか〟という重要な情報を知りたかったからに他なりません。

彼女は、「お寺さんなら普段から死と向き合っておられますよね」、「帰りの

運転は気をつけてください。ショックで運転を誤り、救急外来へ帰って来た人もいますから」、「臓器提供も考えてくださいね」といいました。

「余命は○年」と口にしないものの、今の私は死と無関係でないという当たり前のことを、彼女は、これらのやや厳しい言葉で教えてくれたのです。

仏教では、〝生死一如〟すなわち、「死は生とともに、今ここにある」と説きます。世の中は無常であり、皆が死と背中合わせの今を生きています。なのに、「死ぬのはまだまだ先のこと」と、漫然と構えている自分にそのとき、気づいたのでした。

そして病院からの帰り道……。車を運転しながら、私は奇妙な感覚に襲われました。目に映るもの全てが、なぜかまぶしく光り、輝いて見えたのです。それは自坊※に帰ってからも続きました。

夕方になって、本堂の縁側から境内の木々や鐘楼などを眺めたとき、ふと思ったのは、「これは〝輝く今を生きよ〟というメッセージではないか？」という

ことでした。

がんの再発を知らされたその日から、ひと息ひと息のいのちと向き合う日々が始まりました。それはそのまま、いのちの極みにある私を今すぐお救いくださる、阿弥陀さまの尊いはたらきに気づかせていただく日々……でもあります。

抗がん剤治療の苦しみを縁としてお念仏を味わう生活が、このようにしてスタートしたのです。

※**自坊**　住職をつとめるお寺など、その僧侶が所属するお寺をいう